



日本イスタニヤ学会「会報」

Boletín de la Asociación Japonesa de Hispanistas

第23号 (2016年10月1日) / Núm. 23 (1 de octubre, 2016)

事務局

〒170-0002 東京都豊島区巢鴨1丁目24-1
第2ユニオンビル4F
(株)ガリレオ 学会業務情報化センター内
Tel:03-5981-9824 Fax:03-5981-9852
e-mail: g004esp-mng@ml.gakkai.ne.jp
(http://www.gakkai.ne.jp/ajh/)

広報委員会編集部

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学文学部 現代文芸論研究室
柳原孝敦宛
Tel:03-5841-0260 (内線)
e-mail: yanataka@l.u-Tokyo.ac.jp

目次

【巻頭言】	
高垣敏博 フィールドワークと旅と	2
【エッセイ】	
1. Concha Moreno	
Congreso de Hispanistas 2015	
Conferencia plenaria a cargo de la doctora Emma Martinell.	3
2. 吉川恵美子 メキシコの演劇人がやってきた	
「国際演劇交流セミナー2016 メキシコ特集」からの報告	5
3. 川上茂信 佐野勝也とガルシア・ロルカ	6
【書評】	
1. 本田誠二 ファン・ゴイティソロ『スペインとスペイン人』	8
2. 柳沼孝一郎 上川通夫・川畑博昭編著	
『日出づる国と日沈まぬ国—日本・スペイン交流の400年』	9
3. 坂田幸子 ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ『サーカス』	10
4. 南映子 キルメン・ウリベ『ムシェ 小さな英雄の物語』	12
5. 柳原孝敦 バルタサル・グラシアン	
『人生の旅人たち エル・クリティコン』	13
【国際学会報告】	
1. Roberto Negrón Rivera	
VII Congreso Internacional de la Lengua Española (CILE)	
San Juan de Puerto Rico	14
2. 駒井睦子 国際学術会議、初参加の「記憶」	
The 2016 UTokyo LAINAC International Conference	
“The Power of Memory: Perspectives from Latin America”	16
【国際研究プロジェクト案内】	
1. 棚瀬あずさ 国際研究プロジェクト「ダリオ十年紀」	
：情報通信技術時代の文献学の挑戦	18
【新刊案内】(2015.6~2016.5)	19
【編集後記】	20

【巻頭言】

フィールドワークと旅と

高垣 敏博

1992年のことだったのでもう四半世紀も昔になるだろうか。東大の上田博人さんにある実験に誘われた。東京在住のスペイン人、メキシコ人、チリ人の3名に集まってもらい、都市生活に欠かせないスペイン語の基本語200語を出身地ごとにどう言うのか、絵を見せながらアンケートしてみようというのである。ガラスには *crystal* と *vidrio*、ホッチキスには *grapadora*, *engrapadora*, *corchetera*、バスには *autobús*, *camión*, *micro*, *bus* などいくつものいわば変異形が出てきた。そもそも広域言語であるスペイン語なのに、この種の対照表のようなものがこれまでなぜ存在しないのかという素朴な疑問が発端であった。翌93年には対象を12都市に、調査概念もさらに200ほど追加。各都市の現地研究者と協力してデータ収集するのはどうだろうかとアイデアは膨らんでいった。ちょうどメキシコ・ベラクルスで開催された「ラテンアメリカ言語文献学会」(ALFAL)を利用して、主旨を説明し協力者を募った。それが、『世界のスペイン語語彙バリエーション研究』(*Variación Léxica del Español en el Mundo: VARILEX*)という国際プロジェクトの開始宣言となった。調査項目の選定には、先行文献に加えて現地での観察が不可欠だ。メキシコシティーに移動し、レフォルマ通り、インスルヘンテス通り、ソカロなど5つの地区を設定し、カメラ(まだデジタルではない)とメモ帳を手に店や諸施設を一軒ずつ観察、目に入る文字情報をどんどん記録していった。そのとき撮りためた写真の一部はのちほど『街角で見たスペイン語—メキシコ編』(三省堂)として披露することができた。

こうして、郵送によるアンケートのデータは現在までに相当な量に達し、プロジェクトのサイト(lecture.ecc.u-tokyo.ac.jp/~cueda/varilex/)で参照、検索していただけるようになっていく。得られた語彙データやその統計処理の言語地理学的な意義も認知されつつある。代表的な地域差一覧はわずかな例であるが『クラウン和西辞典』(三省堂)や『ポケットプログレッシブ西和・和西辞典』(小学館)に収められている。

しばらくしてアントニオ・ルイス・ティノコさん(上智大学)が加わり、ラテンアメリカではボゴタ、キト、サンティアゴ・デ・チレ、ブエノスアイレス、リマ、あるいは米国のロサンゼルス、マイアミ、シカゴ、ニューヨークなども含めていくつもの都市に足を運び、現地での観察によるサンプル収集を行ってきたが、それはまた私たちのスペイン語圏に対する好奇心を大いに満たしてくれる旅でもあった。

世紀が変わった2001年ごろ、さらに忙しくなった。今度はスペイン語の「文法の地域差」へと関心が広がり、『世界のスペイン語文法バリエーション研究』(*Variación Gramatical del Español en el Mundo: VARIGRAMA*)を立ち上げたからだ。ここでいう文法バリエーションとは、これまでの方言学とは異なり、所与の文法現象がスペイン語圏各地でどのように実現されるかを比較しその分布を求めるものである。例えば、動詞 *entrar* が伴う前置詞としては *en* と *a* のどちらが一般的なのか、地域差はあるのか。文献を見ると *a* の方がラテンアメリカでより優勢となっているが、日常的に接するスペイン人母語話者の口からも *entrar a* が頻繁に聞かれるのではないか。

このプロジェクトでは、実際にスペイン語圏の都市の大学に赴き、20名ほどの学生にその場で、例えば“*Ellos entraron al edificio*”というようなアンケートの文に対して、「A. 私はそ

のように言う、B. 言わないが聞いたことがある、C. 言わないし聞いたこともない」の三択で答えてもらう。この例のように、スペイン語文法で問題となることが多い現象を含むモデル文を 110 ほど集め、アンケートしてきた。スペイン人約 200 人、ラテンアメリカの学生およそ 300 人分の調査結果がサイト (lecture.ecc.u-tokyo.ac.jp/~cueda/varigrama/index.html) で参照できるようになっている。

ところで、上のアンケート結果は、ラテンアメリカ 14 都市における entrar a の平均受容率 (A の回答) が 65.5%、一方、スペイン 10 都市でも 62.8% であった。このことから a を用いるのは実はラテンアメリカ特有の現象ではないこと、またスペインでも同程度に一般化していることが確認できた。

現地調査はいつもスムーズにいくとは限らない。メキシコシティーでは約束の時間に協力者が揃わず 1 時間の予定が午後一杯かかったし、リマの大学ではアンケートをお願いする代わりに日本について講演をしないといけないことになった。また治安が懸念されるカラカスでは日系の総合商社のご好意で 3 日間運転手付きの防弾車を手配してもらったし、ラパスやクスコでは高山病のせいか発熱、どちらも丸一日起き上がれなかったことなどを懐かしく思い出す。しかし、おかげで、メキシコ、コスタリカ、キューバやプエルトリコ、それに南米の首都はすべて訪れることができた。いうまでもなく、マチュピチュやイグアスの滝、チチカカ湖など重要地点を経由することも忘れない。

それにしてもよく旅してきたものだ。最近はずがに片道 20 数時間の飛行機旅行がこたえるようになってきた。そんなところへ、今年になってバルセロナ自治大学の『スペイン語統語地図』(Atlas Sintáctico del Español : ASINES www.asines.org/) という研究グループから連携の提案を受け、さっそくバルセロナに向かった。ふたたび気力がもどってくる。

どうやらもうしばらくフィールドワークの旅は続くことになりそうだ。

(たかがき・としひろ 神奈川大学特任教授)

【エッセイ 1 学会講演要旨】

Congreso de Hispanistas 2015

Conferencia plenaria a cargo de la doctora Emma Martinell.

Concha Moreno

En el pasado Congreso de Hispanistas, tuvimos la alegría de escuchar y saborear las palabras de la profesora Emma Martinell, invitada de honor al citado Congreso. Nos habló de su ciudad, Barcelona, con objetividad y con calor; una mezcla difícil de lograr; no obstante, en mi opinión, la profesora Martinell, lo consiguió. El título de su conferencia fue “Barcelona, ciudad literaria. Novelas de los siglos XX y XXI escritas en dos lenguas”. Barcelona, en el momento en que la escuchábamos, era candidata a entrar en la red de Ciudades de la Literatura de la UNESCO. Y la conferenciante nos mostró las razones por las que merecería serlo. Un mes y pico después, la Ciudad Condal se unió a esa red, que da marchamo de creatividad a las ciudades que la componen.

Esas razones son múltiples. Una de ellas es el poderío del sector editorial en el que encontramos grandes grupos, pero también editoriales más pequeñas, muy activas en

la publicación de obras de referencia, conocidas por su gran calidad y repercusión entre el público lector. Dentro de este sector no se puede dejar de mencionar la importante labor de Carmen Balcells, agente literaria desaparecida, ya que tuvo en su nómina a todos los grandes, tanto españoles como latinoamericanos.

De este modo pasamos de la edición a la enorme cantidad de escritores y escritoras que se expresan en catalán y en castellano. Esta dualidad a veces ha sido motivo de polémica; así en Frankfurt 2007, no estuvieron representados los autores catalanes que escriben en castellano, lo cual para muchos fue una pérdida más que una reivindicación de identidad. Pero este detalle no puede empañar todo lo que la literatura en ambas lenguas ha hecho por una ciudad a la que llegaron prácticamente todos los escritores del conocido boom latinoamericano. Allí buscaron espacio y oportunidad para escribir y darse a conocer y los encontraron. En esos años, Barcelona se hizo boom, como reza el título de una obra de 2015 de Xavi Ayén.

A la importancia de Barcelona como ciudad de la Literatura no es ajena la transformación que supusieron los Juegos Olímpicos de 1992. Hasta hoy esa renovación representa un ejemplo y un modelo de rentabilidad y satisfacción ciudadana tras las obras llevadas a cabo con motivo de unas olimpiadas. Barcelona se remodeló, dinamizó su turismo y tuvo un gran impacto internacional.

Podríamos decir que Barcelona es una ciudad de película. Y no por ser una hermosa ciudad, con su inevitable legado modernista, sino porque ha sido y sigue siendo el escenario en el que se han desarrollado películas y series de televisión. Desde *La ciutat cremada* de 1976 hasta *Rastres de sàndal* de 2014, pasando por *Todo sobre mi madre* o *Vicky, Cristina, Barcelona*, películas en la que la ciudad misma se convierte en protagonista.

Y para hablar de este protagonismo de la ciudad en la literatura reciente, Emma Martinell puso a nuestra disposición una amplísima bibliografía y nos señaló los siguientes temas que ella había detectado entre las novelas escritas en catalán o castellano durante los siglos XX y XXI. La historia de la ciudad y de sus barrios. Mencionar los barrios no es baladí pues en Barcelona estos siempre han tenido una marca de identidad y sus habitantes se sentían, se sienten orgullosos de su procedencia. Inevitablemente la guerra civil y la posguerra aparecen en las novelas que tienen a Barcelona como protagonista. También las instituciones y su historia aparecen entre los temas encontrados por nuestra conferenciante. Sin ánimo de exhaustividad, aquí menciono algunas de esas novelas que reflejan de una forma u otra todo lo señalado: *La ciudad de los prodigios*, de Eduardo Mendoza. *Nada*, de Carmen Laforet. *La plaça del diamant*, de Mercè Rododera. *El silencio de los claustros*, de Alicia Giménez Barlet. *La sombra del viento*, de Carlos Ruiz Zafón. *Incerta glòria*, de Joan Sales.

Y como cierre de su charla, Emma Martinell nos presentó una serie de imágenes y nos dejó en el aire una pregunta sobre el futuro de Barcelona: ¿Es más una ciudad cosmopolita o arraigadamente local? ¿Es una marca? Queden estas preguntas a disposición de los lectores para que les den respuesta o simplemente les sirvan para

recordar la excelente conferencia de nuestra invitada.

La doctora Emma Martinell Gifre es profesora emérita de la Universidad de Barcelona. Experta en léxico y sintaxis por un lado y por otro en la narrativa de la escritora Carmen Martín Gaité. Asimismo ha estudiado la gestualidad en relación con el español para extranjeros. En este terreno fue socia fundadora de ASELE (Asociación para la Enseñanza del Español como Lengua Extranjera). (Concha Moreno 東京外国語大学)

【エッセイ 2】

メキシコの演劇人がやってきた
「国際演劇交流セミナー2016 メキシコ特集」からの報告

吉川 恵美子

日本演出者協会が文化庁の委託事業としておこなっている「国際演劇交流セミナー」は昨年度から「メキシコ特集」を組んでいる。2015年度は劇作家ダビッド・オルギン(David Olguín)を招いて講演会とワークショップを開催した。今年度は作家のファン・ビジョーロ(Juan Villoro)と演出家のアントニオ・カストロ(Antonio Castro)の両氏を招き、7月3日から4日間の日程で、作品のリーディング上演、講演会、そして日本の演劇人も参加してのシンポジウムを含む「メキシコ演劇をめぐる4日間」と題する意欲的なプログラムを東京で展開した。

企画の目玉はセルバンテス文化センターで開催されたビジョーロのひとり芝居『雨についての講演』(Conferencia sobre la lluvia、訳・寺尾隆吉、演出・山下由、出演・丸尾聡)のリーディング上演であった。まず、この公演の報告から始めたい。

リーディングであるにしろ日本でメキシコ人作家の上演作品を目にする機会はないので、舞台が楽しみだった。私はこの作家を知らなかったので前もって寺尾氏に作品のオリジナルバージョンを送っていただき、読んだ。登場人物は図書館司書の男である。「雨」について講演するとして舞台に登場し、聴衆すなわち観客に向かって話し始めようとするが原稿が見つからない。男は慌てふためき、言い訳をしながら即興での講演を始める。仰々しい作品タイトル『雨についての講演』に身構えていた観客は、冒頭から「登壇者」の人間臭さに引き込まれる。「文学とは雨の降る場所」とする男は、司書生活のなかで古今の文学作品の中から拾い集めた雨についての描写を披露することを主眼に話を進めていくが、やがて自分の人生の打ち明け話が始まる。書物を嫌悪するドライな妻ソレダーとの生活、そして別れ。そこへ若く美しいラウラとの夢のような恋が「降って」きた。男は現実の生活の出来事を語るのだが、「雨」をモチーフとする文学作品がランドマークになっていく。ネルーダ、マラルメ、セサル・バジェホ、フェルナンド・ペソア、コルタサル、ベルレーヌなどからの引用が物語に格別の味を与えているが、ペダントリーに陥ることなく、ユーモラスな語り口が観客を楽しませていた。

チャーホフに『煙草の害について』というひとり芝居の秀作がある。ビジョーロ自身、この作品に影響を受けたことを明かしているが、「雨」のモチーフを用いることでチャーホフとは別の詩的な世界を作りあげていると感じた。スペインのエルビーラ・リンドの戯曲のシーンを思い出す。アパートの一室で密会する初老の男と若い愛人が会話するとき中庭から雨

の匂いが立ちのぼる。様々な情念に揺さぶられて生きるしょうのない人間を静かな雨音と湿気を含んだ匂いが包み込み、赦しを恵んでいく。ビジョーロの舞台に雨は降らないが、「雨」は降り続けていた。

寺尾のなめらかな翻訳は30分を超える舞台をひとりで演じ切らなければならない俳優にとって幸いしたに違いないと思う。しかし、リーディング公演としての質には疑問が残った。俳優は同じ調子で声を張り上げ続けた。演台に見立てた机に置かれた水のペットボトルが劇場外の日常を執拗に主張し続けた。劇の終盤に流された雨音は無表情だった。スタッフは初めてのメキシコ作家の作品に真摯に取り組んだに違いない。時間や情報の制約があるなかで舞台を作り上げる困難も承知はしているが、残念な気持ちが残った。

「メキシコ演劇をめぐる4日間」の他のプログラムについても簡単に触れておきたい。

リーディングを除く3日間に、ビジョーロとカストロは主に20世紀後半のメキシコ演劇の流れを、それぞれ劇作家と演出家の視点から語った。

ビジョーロは、20世紀後半の戯曲がおしなべてリアリズムの手法で書かれた理由は、制度的革命党PRIによる一党独裁的な政治体制の継続にあるとする。メキシコ革命の理想実現を旨としながらも真の民主主義からはほど遠い、民衆と乖離した密室政治が長期間続くなかで、その矛盾を正面から見据えたのが劇作家たちだった。ウシグリ(Rodolfo Usigli)が『身振りをする男』(El gesticulador, 1947年初演)で仮面をかぶった政治指導者を批判し、劇作家には何ができるかの範を示した。ビジョーロは、社会を映し出すリアリズム演劇が後続の作家たちに受け入れられていった状況を具体的な作家や作品を挙げながら丁寧に検証していった。

一方、演出家のカストロは、60年代に始まる新しい演劇理念に影響を受けた演出家たちの仕事を、映像を交えて紹介した。アメリカのリビングシアターやポーランドのグロトフスキーの試みは演劇における「テキスト」と「身体」の意味を大きく変え、戯曲の物語性に依拠しないポストドラマ演劇を構築していったが、メキシコの演劇もしっかりとその系譜の中にあっただということが見えた。

かくして、メキシコの現実に根ざしたリアリズムの劇作家たちと、新しい世界演劇の潮流に乗った演出家のあいだには溝が生まれたが、90年代以降には双方が歩み寄り、新しい演劇の可能性が見えてきたのだと両氏は語った。ビジョーロはリアリズムの作家ではない。現実を美的に再構成することが自分の仕事だと言う。カストロは、形式主義者ではない。社会的メッセージを刻印したポストドラマの事例をいくつも示した。

中身の濃い4日間だった。書物からは見えづらいメキシコ演劇の要点が見えた。目に留まりにくいマイナーな劇団の面白さも知ることができた。実に貴重な機会だったが、リーディングを除く講演会の聴衆は、毎回、企画関係者と「国際演劇セミナー」常連あわせて20人ほどだった。しみじみもったいないと思った。(よしかわ・えみこ 上智大学教授)

【エッセイ3】

佐野勝也とガルシア・ロルカ

川上 茂信

2015年11月27日、佐野勝也という男が亡くなった。名前を聞いたこともないという人が多いかもしれないが、日本におけるガルシア・ロルカ受容の観点からは、興味深い業績を積み重ねた人物だ。

佐野は私と東京外国語大学スペイン語学科 1980 年入学の同期。大学在学中から舞台芸術に打ち込んでいた。東外大の大学祭で行われるスペイン語劇で、1 年目はハシント・グラウの『ピグマリオンの親方』でウルデマラス役を演じ、2 年目はホセ・ソリーリャの『ドン・ファン・テノーリオ』を演出し、5 年目にはミュージカル『エビータ』を演出した。6 年目には柳原孝敦が演出するロルカの『血の婚礼』で乞食（死）を演じた。そして 7 年目の 1986 年には（まだ大学にいて）ロルカ没後 50 年にちなんで首都圏の学生たちを集めていわゆる 3 大悲劇『血の婚礼』『イエルマ』『ベルナルダ・アルバの家』をスペイン語で一挙上演するという企画を敢行する。

佐野は翌年百貨店に就職するが、3 大悲劇を上演した「ロルカ企画」をスペインに持っていく計画を練る。修士課程を終えてちょうどスペインに留学した私は、佐野の「指令」を受けてグラナダに行ったり、来西した彼が交渉に動き回るのについて行ったりした。そして、無謀とも言えるこの企画は 1989 年に実現してしまう。

その後会社を辞めた佐野は、舞台演出家を名乗る。1998 年から 2002 年までフラメンコ舞踊の小島章司と作った舞台が、形になった仕事だ。1998 年の『ガルシア・ロルカへのオマージュ』は舞踊批評家協会賞と舞踊芸術賞、1999 年の『LUNA フラメンコの魂を求めて』は芸術選奨文部大臣賞、2001 年の『アトランティダ幻想』は舞踊批評家協会賞を受賞している。

佐野は踊らないし、フラメンコのリズム体系（コンパス）も恐らく理解・体得していなかったもので、振り付けはできない。やったことは作品の概念的な立案構成と、舞台美術のアイデアだ。そして、作品はロルカと大きく関わっていた。タイトルにロルカがなくても 2000 年の『1929』は「ニューヨークの詩人」から発想した作品だし、2001 年の『黒い音』は「ドゥエンデのからくりと理論」でマヌエル・トーレの言葉として紹介されている「*Todo lo que tiene sonidos negros tiene duende*」から採られている。また、『アトランティダ幻想』は、ロルカとともにカンテの復興に意を用いた作曲家マヌエル・デ・ファリャの未完の大作「アトランティダ」が発想の源泉。そしてバレエ・リュスの『クアドロ・フラメンコ』（この舞台美術はピカソ）へのオマージュが 2002 年の、その名も『クアドロ・フラメンコ』。これらには佐野なりのフラメンコ史理解と伝統への敬意が込められていると言ってよい。

東外大の語劇プロジェクトを手伝ったりした（成果は谷川道子・柳原孝敦編著『劇場を世界に - 外国語劇の歴史と挑戦 -』エディマン）後、2008 年に早稲田大学の大学院に入学。研究テーマは藤田嗣治の舞台美術。画家藤田に関する研究は多いが、舞台美術家としての藤田はほとんど研究されていない。それを正面から取り上げて『藤田嗣治の舞台美術と劇場空間』で 2013 年に博士号を取得した。

同年イスパニヤ学会に入会し、大会では「ガルシア・ロルカとバレエ・リュスに関する一考察」というタイトルで発表している。佐野のアプローチは、ロルカをファリャやバレエ・リュスといった項との関係の網目の中に置いて見るというものだった。舞台美術家としてのロルカが同時代のバレエ・リュスに関心を持たなかったとは考えにくい。だからその公演を見ていたかもしれない。そしてその痕跡がロルカの作品に残っているかもしれない。と佐野の思考は続く。面白いし、あり得る話ではあるが、それをどう証明するか。佐野は資料集めに没頭し、状況証拠めいたものは見つけたが、やはり新発見というわけにはいかなかった。ともあれ、半分以上はだめだと分かっているにもかかわらず、私も研究者として見習いたいと思う。無駄なことはしないという考え方から新しいものは生まれない。

悪性リンパ腫が見つかったのが2014年12月。それから1年もしないうちに佐野は自分の人生に幕を下ろしたのだが、亡くなる2週間ほど前に、大学同期の数人で自宅に見舞いに行った。我々を待ち受けていた佐野は、いつものように分厚い資料を用意して、実際にあるいは彼の頭の中で進行中のプロジェクトについて、ベッドに寝たまま「やりたかったなあ」と言いつつ熱く熱く語った。藤田のこと、そしてとりわけロルカのこと。『血の婚礼』について、そして『ソドムの滅亡』について。ロルカの『ソドムの滅亡』と聞いて微笑した人は佐野のことが分かっている人だ。彼は最後まで彼らしく生きたのだった。

(かわかみ・しげのぶ 東京外国語大学教授)

【書評 1 自訳書紹介】

ファン・ゴイティソロ『スペインとスペイン人』（本田誠二訳、水声社、2015年）

本田 誠二

本書は現代スペインの作家ファン・ゴイティソロの『スペインとスペイン人』（*España y los Españoles* ドイツ語版 *Spanier und Spanien* 初版1969、Frankfurt, スペイン語版初版1979, 第二版2002, Editorial Lumen, Barcelona)の翻訳である。

ファン・ゴイティソロ (Juan Goytisolo, 1931-)はフランコ時代の1969年に、ドイツにて出版した『スペインとスペイン人』（スペイン語からのドイツ語訳）において、スペイン内戦に至るスペイン人のあり方について、文学と歴史を通して本質的かつ批判的な視点を提起した。反フランコの立場に立つゴイティソロにとってスペインは依然として反ユダヤ、反イスラムの〈キリスト教騎士〉の国であり、神話的なホモ・ヒスパニクス（原スペイン人）の支配する国であった。このカタルーニャ人作家にとって、こうした伝統的価値は《闘牛とフラメンコ》のステレオタイプのスペインの背景にあって、異論を唱える少数派の人々を排他する厭わしいイデオロギーであった。本書は文学者としての視点と、文明論的視点からなされた、スペイン批判の書である。

本書はその内容の過激さゆえにフランコ体制下のスペインで出版ができず、フランコ死後の1979年になって初めて、スペイン本国で本来のスペイン語版が刊行された。従って一般的なスペイン人論ではなく、亡命作家たる特殊な背景を反映にし、いわば外部的視点から書かれたものである。ゴイティソロと同じような立場にあって、ともに反ドグマティズムの視点から、彼の人と作品にずっと大きな関心を向けてきた歴史家アメリコ・カストロは、ゴイティソロと交わした書簡のなかでこの書の内容の独創性を讃えるだけでなく、「とりわけ学問的な言語である」ドイツ語で刊行されたことこそ喜ばしいと述べている。それは神話ならざるスペインとスペイン人の実像を、より広くヨーロッパに《学問的に》伝えることができたからである。ゴイティソロが本書を『スペインとスペイン人』としたのも、畏友にして師たるカストロへのオマージュとしての意味があったからにちがいない。

ゴイティソロは代表作の三部作（『フリアン伯の復権』『土地なきファン』『身分証明』）に見られるような過激な小説を書く傍ら、文芸・文明批評家としても名高く、みずからの周縁性（カタルーニャ人、同性愛者にしてイスラム文化愛好者）を武器として、自らをスペインの《他者》として、スペイン史とスペイン文学、スペイン文明に関して、スペイン語でもって積極的な発言を行ってきた。そうしたスペイン文明論の最初の成果が本書である。

カストロが行ったスペイン史の見直しや、スペイン文学の新たな解釈による、スペイン的なものの脱神話化の仕事は、既存の保守的知識人にとっては、爆弾のような危険を伴っていたが、スペインやスペイン語そのものを解体する意図はなかった。一方、弟子たるゴイティソロは小説家として、師たるカストロの歴史観を自らの見方に取り込み、フィクションのなかで言語そのものを解体することによって、スペイン神話を切り崩そうとしたのである。まさに言語そのものを小説のなかで解体し、いわゆる酸素爆弾を、息苦しく窒息しつつあったスペイン社会にぶちまけようとしたのである（小説『この世でもあの世でも亡命者』2008年のテーマ）。いわば観念的なテロリストである彼にとって、イスラム的なもののもつエロス性・寛容性を復活させて、かつて『良き愛の書』が象徴したような《猥雑で自由で快樂的な》スペインを取り戻すことが、異端審問や《血の純潔》や名誉観、男らしさ、権力と独裁と検閲で死に体となったスペインを生き返らせる唯一の道であった。そうしたスタンスを取り続けることは、スペイン内部においては不可能であった。フランコ亡き後もなおゴイティソロは自らの意志でスペインには戻らず、一年の半年をパリ、残りの半年をモロッコ・マラケシュで過ごしている。かくして今に至っても自主的な亡命者の道（「永遠の少数派」）を選んでいるのである。ゴイティソロのこうした一匹狼的なあり方は、何よりもその原点に、文学者としての自立性こそ、最も守るべき作家の価値だとの思いがあるからである。だから彼には一切のタブーはない。書くという行為（エクリチュール）そのものを自己の《身分証明》としているからである。それを犯すものに対しては容赦なき筆誅を加える。何よりも書くことへの自由を求めているからである。

日本におけるゴイティソロ作品の翻訳は『フィエスタス』（限定出版）、『戦いの後の光景』、『サラエヴォ・ノート』、『嵐の中のアルジェリア』、『パレスティナ日記』（以上、みすず書房刊）など、分野もルポルタージュ的なものに偏り、代表的な小説や評論はごく限られていて本格的な紹介は「未だし」のままに留まっている。訳者としては本書がきっかけとなって、日本でより広くこの異色で精力的なスペイン作家に対する関心が広がることを期待している。

（ほんだ・せいじ 神田外語大学教授）

【書評 2】

上川通夫・川畑博昭編『日出づる国と日沈まぬ国—日本・スペイン交流の400年』
（勉誠出版、2016年）

柳沼 孝一郎

本書は、「地域」によって生かされ、「地域」に寄与することを旨とする愛知県立大学の、専門領域を異にする研究教員が大航海時代をめぐる共同研究（「大航海時代の戦国愛知」、「大航海時代の戦国日本—イベリア世界との接触から照射される前近代の自我形成の磁場」、「大航海時代のイベリアンインパクトと日本社会における民衆意識形成に関する総合的研究」）を重ね、同大学の「日本スペイン人文学セミナー」に参加した日本とスペインの研究者が、歴史学・文学・法学・言語学など複眼的な方法と、スペインやポルトガルとの接触が日本の近世化にいかに関与したかという「イベリア・インパクト論」を駆使し、16世紀から現代までの日本とスペインの関係について、「第一部 大航海時代の日西交流—思想・言語・知識」、「第二部 皇権と王権—法と信仰の比較史」および「第三部 異文化交流の諸相

一前近代から現代まで」の視点から論じた研究成果の集大成である。

周知の通り、ヨーロッパ世界の人々にとって未知の国であった日本は、マルコ・ポーロの『東方見聞録』のなかで「黄金の国ジパング」として紹介されたが、この書によって、古来より流布されていた極東の太陽の昇る下に存在するという黄金郷すなわち「金銀島伝説」がさらに現実味を増し、日本に対する関心と憧憬が高揚され、やがて日本を求めてヨーロッパ人が相次いで来航した。イベリア半島からイスラム勢力を一掃した国土回復運動（レコンキスタ）、ルネッサンスの興隆、宗教改革を達成させた激しいエネルギーが冒険精神をかきたて、「大航海時代」を生み、ヨーロッパ世界と日本を結びつけたのである。16・17世紀における日欧交渉は大航海時代の延長線上で始動し、イベリア両国が日本での布教権と通商権をめぐる対立する関係に、やがてオランダとイギリスが日本における主導権の確立を目的に介入するという、いわば旧教国对新教国の衝突と拮抗が錯綜するなかで展開された。

日本とスペインの直接的な出会いは、本書で言及されているように、1549年（天文18年）にフランシスコ・ザビエルらスペイン人宣教師一行が鹿児島に上陸した史実を起点とし、1579年に来日した巡察師アレシヤンドロ・ヴァリニャーノが、若い日本人キリスト教徒にヨーロッパのキリスト教世界とその文化に触れさせ、教会関係者にキリシタン（切支丹）に改宗した日本人を見せ、日本における布教の実態と成果を誇示し、日本布教への理解と協力および援助を得ることを構想し、1582年（天正10年）に実施された、伊東マンチョなどからなる「天正遣欧少年使節団」の派遣、ザビエルに同行したフアン・フェルナンデス（コルドバ出身）の「説教集」や「教理問答書」（カテキズム）の日本語訳書、1549年から1619年まで長崎に滞在したスペイン商人ベルナルディーノ・デ＝アビラ・ヒロン著『日本王国記』に繋がる。それらを基盤として形成されたキリスト教と南蛮貿易すなわち布教と貿易の不可分の関係のなかで、アフリカ大陸を迂回する東廻りとスペイン領ヌエバ・エスパーニャを経由する西廻りの航路を辿ったイベリア両勢力は東アジアで遭遇、必然的に両者は布教権と通商権をめぐる対立し、その拮抗関係は日本までもたらされ、こうした対立関係の状況下に豊臣秀吉は「キリシタン禁令」を發布、その結果「長崎二十六聖人殉教」という政治事件にまで発展し、徳川家康幕府時代にスペイン領フィリピン総督府との外交交渉を経て、伊達政宗との共同計画いわゆる1613年（慶長18年）の「支倉常長遣欧使節」の派遣へと継承される。

ユーラシアの東と西、すなわち極東の島嶼に位置する「日出づる国」（el Imperio del Sol Naciente）とイベリア半島に位置する「日沈まぬ国」（el Imperio en el que nunca se ponía el sol）の400年に及ぶ「日本・スペイン交流の400年」の系譜、いわば「東西交流の源泉」を論じた本書の一読を薦めたい。
（やぎぬま・こういちろう 神田外語大学教授）

【書評 3】

ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ『サーカス』（平田渡訳、関西大学出版部、2016年）

坂田 幸子

平田渡氏によるラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ（1888-1963）の翻訳は、『グレグリーア抄』（2007）、『乳房抄』（2008）に続いて、この春刊行された『サーカス』が三作目となる（いずれも関西大学出版部）。これら三作の原作は同じ年に刊行され相互に緊密な関係があるので、まずは手短かに全体像を紹介したのち、この書評の対象である『サーカス』について述べ

たい。

ラモンは二十歳の頃から「プロメテウス」*Prometeo* という文芸誌を主宰して、フランスをはじめとする欧米諸国の最新文学の紹介に力を注ぐ。たとえば、1909年にマリネッティがフランスの「ル・フィガロ」紙に未来派宣言を発表したときは、もうその年のうちにスペイン語訳を掲載した。また彼が1915年からマドリードのカレータス通りにあるカフェ・ボンボで開いた談話会(テルトゥリア)には、国内外の作家や画家たちが集い、文学や芸術の動向を論じた。そうしたラモンに作家として豊かな実りの時期が訪れるのが1917年であり、平田氏が訳した三冊の原作は、いずれもこの年に上梓されたものだ。

グレゲリーアとは、ラモンが創り出した、ほんの数行から成る独自の短詩形で、彼自身の定義によれば「諧謔+隠喩」である。最初に『グレゲリーア』*Greguerías* が出版されたのは、上述のように1917年。ラモンはその後も生涯にわたってグレゲリーアを作り続け、その総数は優に一万を超える。『グレゲリーア抄』は、そのなかから訳者が取捨選択し、独自に設けたテーマごとに再構成したものである。表紙絵は、ディエゴ・リベラがキュビズムの手法で描いたラモンの肖像画。『乳房抄』も、原作『乳房』*Senos* から訳者が選んで編みなおしたもので、すべてこれ乳房をめぐる小品から成る。特徴ある乳房の記述、乳房をめぐる思い出や逸話、空想上の不思議な乳房などが、奇譚、小咄、追想、随筆、グレゲリーア風の超短詩など、さまざまな形をとって語られる。表紙絵はモディリアニの裸婦デッサン。『サーカス』*El circo* の内容については後述するとして、表紙絵はルオーが描いたマドレーヌという名の道化師。

訳書の表紙絵に言及したのはなぜかと言えば、これら三冊はすべて、表紙絵の選定に始まり書物の細部に至るまで、ラモンの作品世界を具現化すべく、訳者自身が心を砕いて装幀したのだからだ。訳文は三冊をつうじて、平田氏独特の文体で、軽妙洒脱にしてまろやかで味わい深い。原作者の機知や才気と訳者の粋を好み風雅を解する心とがひとつになった書物といえよう。

さてでは『サーカス』だが、これは他の二冊が訳者によって再構成された抄訳であるのに対し、全訳でおおよそ500頁にも及ぶ。奇想天外な表現や破格な構造の文も多く、さしもの平田氏も苦心なされた様子が垣間見えるが、それでもこの作品の魅力をじゅうぶん伝えているだろう。サーカスを偏愛し、「番記者」を自認するラモンは、パリやマドリードで公演に通り詰め、プログラム冊子を蒐集した。この書は、サーカス興行の形態や運営の一部始終、幕開けから休憩を経て終演に至るまでの数々の演目、客席を埋める観客の社会階層や服装、一世を風靡した実在のサーカス芸人などを事細かに記述したもので、文化史的観点からも興味深い。と同時にラモンは、道化師の滑稽な芸や悲哀、曲馬や綱渡りをするおんな芸人の姿態(なにしろ女体の観察に余念ない『乳房』の作者である)、象や熊やアシカといった動物の得意芸、観客が沸き立ちどよめく様などを、意表をつく比喻や誇張した言い回しで活写する。ラモンの筆は、サーカスという空間に驚異や夢幻が出現する瞬間をすかさずとらえ、あるいは拡大鏡を覗くように、あるいは凹凸鏡に映すようにして描くのだ。さらにたとえば、逆さ吊りの芸人の胸中を述べる箇所ではページの天地を逆にして活字を組んだり、馬の登場したあと舞台に残される蹄鉄の跡は不規則に並ぶCの文字で表すなど、視覚的要素を取り込む実験的手法も使っている。『サーカス』とは、かつてこの興行が輝きを放っていた時代の貴重な記録であると同時に、前衛的な手法で表現され、来たるべきシュルレアリスムをも予感させる唯一

無二の作品なのだ。

なお、ここで紹介した三冊の訳書のうち、『乳房抄』には翻訳の底本にどの版を使用したのか記されているが、『グレグリーア抄』と『サーカス』では残念なことに底本への言及がない。

(さかた・さちこ 慶應義塾大学教授)

【書評 4】

キルメン・ウリベ『ムシェ 小さな英雄の物語』（金子奈美訳、白水社、2015年）

南 映子

先の大戦中の出来事を思い出すお年寄りの語りを聴き、とても辛い時代だったのだろう、体験していない自分には想像もできないけれど、と言う。何年も前の夏に見たTVの特集番組で、スタジオに招かれた若い一般視聴者が口にした感想が忘れられない。安易にわかった気になってはならないと自らを戒める謙虚で率直なことばなのかもしれない。だが、想像力の行使を放棄することに、他者を突き放すことにはならないだろうか。

人はどのように他者の記憶と向き合い得るのか。バスク語の作家キルメン・ウリベの小説『ムシェ』は、この問いに対する一つの示唆を与えてくれる。ベルギーのヘントに生まれた「小さな英雄」、ロベール・ムシェをめぐる物語だ。表紙に用いられた写真の中で幼い娘を腕に抱き、颯爽とした風情の妻の隣で優しい微笑みを浮かべるムシェは実在の人物であり、スペイン内戦中にはバスクからベルギーに渡った疎開児童の少女カルメンチュ・クンディンを引き取り、第二次大戦中、ナチスの支配に抗するレジスタンス運動に身を投じた。拘束され移送されたノイエンガンメ強制収容所での過酷な状況は辛くも生き延びたが、ナチスの降伏直後にリュウベック港で起きた悲劇的な事件により命を落とした。

小説の第三部で明かされるように、ウリベは以前からバスクの疎開児童の体験に関心があったものの、然るべき語り方を見いだせずにはいたという。あるときカルメンチュとロベールの話を聞いて興味を持ち、カルメンチュについて調べるうちに自身とロベールの物語が重なることに気づき——親友を亡くしたのと時を同じくして娘が誕生し、作家は悲しみと喜びの間で当惑していた——、これこそ自分の語るべき物語だと確信した。ウリベはロベールの一人娘カルメン・ムシェを訪れ、彼女が母ヴィックから受け継いだロベールの蔵書や手紙、書き物、所持品、ヴィックの日記、ヴィックから聞いた思い出話、そしてロベールの親友であった作家ヘルマンが著した追悼の本を主な手がかりとし、カルメンをはじめとする様々な人たちから「手がかり」を読み解くためのヒントを得て（時には誤解を正してもらい）、物語を組み立てていったのだ。

ウリベの第一長編小説の翻訳も手がけた訳者は、本書の「あとがき」において、『ムシェ』を前作に続くオートフィクション——作者と同名の語り手・主人公が登場するものの、自伝でもエッセイでもなく小説、すなわちフィクションとして提示されるという境界的なジャンル——の系列に位置づけている。実際、語り手が前景化されるのは最後の部分のみだが、ロベールの「物語」を、そしてその中に登場する人物たちのことを知ろうとし、かれらが抱いたであろう感情、発したであろうことば、取ったであろう行動を想像する書き手の姿は、想像の出発点とした手がかりとともに端々に示されている。たとえば小説の冒頭。疎開児童に

関する基本的な情報を確認した後、語り手 - 作者である「僕」はバスクからベルギーに渡ったカルメンチュの旅を思い描こうと、同じ経路を辿った老姉妹のもとを訪ねる。彼女たちのことばを聞き、読者に伝え、「そして今ようやく、ミランテ姉妹の証言をもとに、ハバナ号に乗船したカルメンチュ・クンディンを思い浮かべることができる気がする」と記したうえで、カルメンチュと兄ラモンの船旅、ヘントへの到着、ロベールとの出会いの場面を描いてみせるのだ。登場人物たちが生き生きと動く場面、つまり作者の想像した箇所的大部分は現在形で書かれ、事実の経緯を追う、過去形で書かれた部分と明らかに区別されている。読者はその違いを常に意識しつつ、それでも物語に引き込まれていく。

語りの見事な構成（たとえば日記の配置の仕方）、取り出せば一篇の詩が書けそうな断章の数々（たとえば自転車が登場する二番目の逸話）もすばらしいが、ロベールを失った三人（夫の生還を待ち望んだヴィック、父の生きた痕跡をたどろうと決意したカルメン、親友の死を悲しんだヘルマン）の気持ちを尊重しながら丁寧に「事実」を組み立て、想像の中で死者を生き返らせる作者の手つきそのものを読者に見せてくれることが、『ムシエ』の最大の魅力だろう。

最後に、本書が第2回日本翻訳大賞を受賞したことを記しておきたい。翻訳そのものの価値はもちろん、タイトルや表紙の選定、そして行き届いた解説も併せたすべてが、一冊の本として、高く評価されたものと思われる。（みなみ・えいこ 中央大学助教）

【書評 5】

バルタサル・グラシアン『人生の旅人たち エル・クリティコン』
（東谷穎人訳、白水社、2016年）

柳原 孝敦

加藤諦三が翻訳紹介した『賢者の教え』（1993）を遠い起源としつつ、実質的には『バルタザール・グラシアンの賢人の知恵』（2006）が先陣を切り、『賢く生きる知恵』（2007）、『賢者の処世術』（2013）などが出され、近年グラシアンはビジネスマンのための自己啓発書のジャンルで認知されるようになってきたかの観がある。

東谷穎人さんご自身がこの流れに棹さすように『処世の知恵—賢く生きるための 300 の箴言』を世に問うたのは5年ばかり前のことだった（2011）。そして今回、満を持して主著 *El criticón*（1651, 1653, 1657）三部を『人生の旅人たち エル・クリティコン』として全訳出版した。B5判二段組みで本文700ページ強、詳細な訳注が90ページ、「訳者あとがき」も二段組みのまま20ページ弱を数え、合計825ページの大部になった。

これだけの浩瀚な書物の内容をひと言で表現するのはどだい無理な話ではあるが、あえてその暴挙を犯すなら、本書はアレゴリー小説である。アレゴリーと小説（ボルヘスのエッセイのタイトルになった二分法）の狭間に位置する世界と人間の物語である。

原書が出版されたのは17世紀の半ばを折り返してすぐのところだ。スペインが誇る黄金世紀の文芸はバロックにその頂点を極め、奇知主義やカルデロンの聖体神秘劇『世界大劇場』のアレゴリー表現の達成を見た少し後だった。これらの文芸上の遺産を受け継ぎつつも、大航海時代の航行と難破・漂流を前提とした旅物語の要素も採り入れた面白い読み物が本書なの

である。航海の物語は、やがて例えばイギリスで『ロビンソン・クルーソー』や『ガリヴァー旅行記』などに結実し、そこから小説というジャンルが展開していく。そうした18世紀の文芸思潮をも先取りしているということだ。

クリティーロがセントヘレナ島に漂着、現地で動物に育てられた青年アンドレニオに助けられ、彼に言葉を教え、2人でスペインへ、そしてイタリアへと旅をする物語だといえ、いかにも航海と漂流の物語だし、クリティーロが漂流する原因となったのが、インドのゴアでの恋の末、決闘で犯した刃傷沙汰が発端なのだとも明かされ、読み進むうちにクリティーロの旅がその恋の相手フェリシンドを探す旅だと気づけば、極めてロマンティックな恋の物語の様相も見えてくる。これが小説的な側面だ。

しかし、クリティーロとアンドレニオは「人生の旅人たち」である。彼らの旅そのものがアレゴリー的だ。人間の人生を幼年期（春）、青年期（夏）、壮年期（秋）、老年期（冬）の4つに区分し、それぞれの時期に対応する土地（セントヘレナ→マドリードなど→アラゴン→イタリア）を経巡るのだから。そして行く先々で半身半獣や神話の人物、〈歴史さま〉、〈老境さま〉といった文字どおりのアレゴリカル・キャラクターなどと知り合い、対話を交わす。実は途中、新世界の植民地における魑魅魍魎が叙述され、これはすっかり植民地主義に毒されたテキストだと批判のひとつも向けたくなるのだが、旧世界でもこうした人間ならざる存在が人間と共存しているのだから、矛先を治めるしかない。そんな旅は小説的な（リアルな）ものとはだいぶ様相を異にする。

旅人ふたりが旅先で交わす言葉は風刺であったり現在でも首肯したくなる処世訓であったり、歴史的な背景に支えられた証言であったりと多様だ。グラシアンを処世訓のモラリストとのみ理解してはならない。心して読むべし。これが本当の賢者の教え。

（やなぎはら・たかあつ 東京大学准教授）

【国際学会報告 1】

VII Congreso Internacional de la Lengua Española (CILE)

San Juan de Puerto Rico

Roberto Negrón Rivera

Del 15 al 18 de marzo San Juan de Puerto Rico fue la ciudad anfitriona del evento más importante de la lengua española: el Congreso Internacional de la Lengua Española (CILE) 2016. Bajo el tema *Lengua española y creatividad*, se dieron cita en este evento -organizado conjuntamente por el Instituto Cervantes, la Real Academia Española (RAE) y la Asociación de las Academias de la Lengua Española (AALE), junto con el Gobierno del Estado Libre Asociado de Puerto Rico-, escritores, académicos, periodistas, científicos y artistas de todas las ramas y de todo el mundo en busca de un intercambio de ideas y percepciones sobre distintos temas relacionados con nuestra lengua española: su difusión, su unidad en la diversidad, sus retos actuales y sus metas para el siglo XXI.

La apertura estuvo a cargo del rey Felipe VI, que llegó a la sala del Centro de Convenciones de San Juan acompañado de la reina Letizia. El monarca comenzó su alocución con un agradecimiento a Puerto Rico por la acogida que dio tras la Guerra Civil



española a tantos exiliados españoles, entre ellos, Pedro Salinas y Juan Ramón Jiménez, a quienes se les dedicó, junto al poeta puertorriqueño Luis Pales Matos y al escritor nicaragüense Rubén Darío, este séptimo congreso de la lengua. Recalcó además con mucho énfasis que el español tiene una fuerza demográfica sin precedentes en el mundo, por ser la segunda lengua más hablada -unos 490 millones de personas, después del chino mandarín-, y afirmó que el español ha dejado de ser "una lengua marginal de emigrantes" para incorporarse como lengua social y de cultura en la población estadounidense, donde el español es hablado por casi 50 millones de personas, y siguiendo este argumento, recordó que para el año 2050 Estados Unidos será el "primer país hispanoparlante" en el mundo. Al final de su intervención, por encontrarse en Puerto Rico, el rey en su discurso destacó el gran esfuerzo y la entereza de todos los puertorriqueños por defender y preservar continuamente la lengua española y su identidad hispana a pesar de su relación política con los Estados Unidos por más de 118 años.

Durante esa semana, tanto el Instituto Cervantes como el periódico El País, que celebraban respectivamente su 25 y 40 aniversario, tuvieron una participación muy activa en el congreso, con talleres abiertos al público en general y sesiones plenarias de temas especialmente relacionados con la difusión de la lengua española en el mundo y su diversidad lingüística. Víctor García de la Concha, director del Instituto Cervantes, en la sesión plenaria *El español, lengua de comunicación internacional. Veinticinco años del Instituto Cervantes*, resaltó en gran medida el trabajo y esfuerzo que ha realizado el Instituto Cervantes durante estos últimos 25 años en promocionar y difundir la enseñanza de la lengua española y la cultura de los países de Latinoamérica y España. En la actualidad hay repartidos por todo el mundo unos 90 centros en 43 países, informó el señor García de la Concha; además, aprovechó el momento para destacar la gran necesidad que hay de divulgar la enseñanza del español en lugares como Asia y África subsahariana, en donde hay un interés creciente por el español. Asimismo éste destacó que "Estados Unidos es en estos momentos la base más firme para que el español se consolide como segunda lengua de comunicación internacional".

Fueron muchos los invitados distinguidos que expusieron en las salas de este congreso: unos 150 en total, de 25 países. Los reconocidos Mario Molina, premio Nobel de Química en 1995, que abogó por más inversión financiera por parte de los países

hispanoamericanos en las ciencias, y el escritor francés Jean-Marie Le Clézio, premio Nobel de Literatura en 2008, que realizó una ponencia sobre el tema de la creatividad, fueron los más esperados en esta cumbre de la lengua. Otros renombrados invitados, como los escritores chilenos Antonio Skármeta y Jorge Edwards, el cubano Leonardo Padura, el español Eduardo Mendoza, los puertorriqueños Luis Rafael Sánchez y Eduardo Lalo, entre otros, hicieron acto de presencia en conferencias, coloquios y lecturas relacionados con las letras, como el homenaje a la poesía en general en *Hispanoamérica y la esencia de la lengua: Homenaje a la poesía*, y a Miguel de Cervantes y su obra por el cuarto centenario de su muerte en *Tradición y creatividad: las lecciones cervantinas*. Otro de los grandes homenajeados en el congreso lo fue el escritor e historiador peruano el Inca Garcilaso de la Vega.

El poeta, y presidente de la Academia Puertorriqueña de la Lengua Española, José Luis Vega, tuvo la encomienda de clausurar el congreso, y arrancó con unos versos del escritor español Miguel de Unamuno: “la sangre de mi espíritu es mi lengua”, reivindicando de esta forma la idiosincrasia hispanoamericana que permea en Puerto Rico, y recordó además a los presentes que “atendiendo estrictamente a las cifras demográficas, el español sería un idioma americano con un apéndice europeo”; aunque no dudó en reconocer que de las 22 naciones que comparten la lengua castellana, ninguna como España ha invertido tanto capital destinado a hacer del idioma una herramienta para todos.

Nuestra próxima cita con la lengua española será en Córdoba, Argentina, ya que esta ciudad presentó oficialmente al Instituto Cervantes y a la Asociación de las Academias de la Lengua Española su candidatura para acoger el VIII Congreso Internacional de la Lengua Española en el 2019.

Previos anfritiones del CILE: Zacatecas, México 1997; Valladolid, España 2001; Rosario, Argentina 2004; Cartagena de Indias, Colombia 2007; Valparaíso, Chile 2010; Ciudad de Panamá, Panamá 2013.

Para información sobre el VII Congreso Internacional de la Lengua Española, Puerto Rico: <http://cile2016.com/> (Roberto Negrón Rivera 同志社大学)

【国際学会報告 2】

国際学術会議、初参加の「記憶」

The 2016 UTokyo LAINAC International Conference
“The Power of Memory: Perspectives from Latin America”

駒井 睦子

2016年6月10日（金）から12日（日）までの3日間、東京大学ラテンアメリカ学術ネットワーク（LAINAC）主催の国際学術会議が、同大学の駒場キャンパスにて開催された。LAINACとは、「東京大学とラテンアメリカ及びスペインの有力大学との間の研究教育関係を

強化することを目的として、2014年に本学教養学部、総合文化研究科内で発足したプロジェクト」である (<http://www1.lainac.c.u-tokyo.ac.jp/about>)。この国際会議では、招待講演者 (Carlo Severi 氏、Marco Antonio Estrada Saavedra 氏、Luisa Valenzuela 氏) をはじめ、世界各国から集ったさまざまな研究者が、ラテンアメリカと記憶というテーマに基づいた報告を行った。私もその一人である。プログラムによると、この3日間での報告は36本であった。

私は、3名の研究者で構成された「文学における記憶」というセッションで、“La evolución de la memoria sobre las obras poéticas de Alfonsina Storni como muestra de la transición literaria en Argentina” という題目の報告を行った。近代アルゼンチンの女性詩人 Alfonsina Storni の詩についての批評および雑誌に掲載された記事を、彼女の作品に関する「記憶」とみなし、同時代から現代まで時系列順に分析しつつ扱った。Storni 作品の「記憶」の変遷が示す、アルゼンチンの文学的状況について検討することがねらいであった。

2番目の報告者 Antonio Ginés Collado González 氏 (デラウエア大学) は Jorge Luis Borges を、3番目の報告者である Jorgelina F. Corbatta 氏 (ウェイン州立大学) は、Ricardo Piglia の最新の小説 (El camino de ida, 2013年) についての報告を行った。本会議では唯一の文学セッションにおける報告が、いずれもアルゼンチンの作家たちに関するものだったことは、大変興味深かった。

海外の学会でこれまで発表しなかった私にとって、ラテンアメリカに関する国際学術会議が東京で開催されたことは、願ってもない機会であった。初めての国際学術会議では、報告の内容以外にも色々と学ぶことがあった。例えば、海外の研究者の発表の流儀についてである。私は5つのセッション、計15本の報告を聞いたが、聴衆に印刷物を配った報告者は、自分以外にはいなかった。これが国際学会の標準スタイルなのだろうかと思った。また、テキストの引用の仕方についても得るところがあった。私は詩の引用を朗読せず、スクリーン表示と配布資料に限定したのだが、強調したい部分を音読する報告が目についた。テキストをその場で、たとえ一部でも声に出して読む方が、より聴衆に訴えかけるものがあるように感じられた。スクリーンに表示しながら、なおかつ表示したテキストを音読する発表もあり、これは更にわかりやすかった。このようなやり方を、次は自分も真似てみたいと思う。

パワーポイントをはじめとするPCのプレゼンテーションツールを用いた発表は幾つもあったが、その一方で、視覚資料を一切用いず、原稿をずっと読み上げる発表者も多かった。どの報告者も少しでも多くの情報を発表しようと、大変な速さで饒舌に報告文を読み上げた。そのような超高速のスペイン語 (または英語) での発表を、20分の間集中して聞き取るのは中々大変なことだと思い知った。普段から、もっとスペイン語力を鍛えなければならないことを痛感した。

土曜日の夜に開催されたレセプションで、他の発表者から私の報告に関する意見や、それぞれの研究の動向についての話を聞くことができた。メールアドレスを交換し、後日連絡をくれた人もいる。このように報告以外の場において、世界各地のさまざまな研究者達と知り合い情報交換ができたのは、国際学術会議ならではの貴重な経験である。会議の参加費は無料で、これも大変有り難かった。LAINAC がこのような素晴らしい国際学術会議を日本で開催してくれたことに心から感謝申し上げる。主催者の皆さんのご尽力、並びに、ご多忙の中

モデレーターを務めて下さった柳原氏に、この場を借りて心よりお礼をお伝えしたい。実り多いこの「The Power of Memory (記憶と力)」という学会会議が、参加者をはじめとする全ての関係者の「記憶」に長くとどまることを確信している。

(こまい・むつこ 清泉女子大学非常勤講師)

【国際研究プロジェクト案内】

国際研究プロジェクト「ダリオ十年紀」：情報通信技術時代の文献学の挑戦

棚瀬 あずさ

スペイン語文学におけるモデルニスモの提唱者であるニカラグア出身の詩人ルベン・ダリオの没後 100 年にあたる 2016 年は、学会等のイベント開催や書籍刊行など、ダリオに関連する学術・普及活動がスペイン語圏をはじめとする諸地域で活発に行われている。本稿においては、中でも発足したばかりの国際研究プロジェクト「ダリオ十年紀」(Década dariana)を紹介したい。

「ダリオ十年紀」は、アルゼンチンのトレス・デ・フェブレロ国立大学 (UNTREF) の主導により始まった、今後 10 年間にわたる次の 2 つの作業の実施を目指すプロジェクトである。

1. Archivo Rubén Darío Ordenado y Centralizado (AR.DOC) : 様々な国のアーカイブに散在するダリオの手稿、書簡、新聞・雑誌記事、写真等の資料を一元的に目録化した、あらゆる人が自由にアクセス可能なデジタルアーカイブの作成。ラプラタ地域に所在する資料については、電子化を進めアーカイブ上で閲覧可能にする。

2. Obras completas. Edición crítica (OCEC) : ダリオの既知の作品すべてを収める全 20 巻の批判校訂版全集の出版。最大限の文献学的厳密さをもつテキストの版を異稿や正確な日付・出所とともに提供するほか、豊富な解説注、用語集、資料補遺、ファクシミリ等を付す。

プロジェクトにはラテンアメリカ諸国、米国、スペインの研究機関に所属する実績あるモデルニスモ研究者たちが既に参加を表明しており、メンバーは今後も増えることが見込まれている。

ダリオは生涯に幾度も活動拠点を移しながら一チリ、中米諸国、ブエノスアイレス、マドリッド、パリ、各地の様々な媒体に記事を書いて生計を立てた。ダリオに関する資料が各地に散在しているのは、スペイン語圏全域における生前からの名声と、このような活動拠点の多さに由来する。手稿や書簡等については、1899 年以降のパートナーであったスペイン人女性フランシスカ・サンチェスが保管していた資料を基とするマドリッド・コンプルテンセ大学の Archivo Rubén Darío 及びチリ国立図書館や、フアン・ラモン・ヒメネスが亡命中に寄贈した資料を所蔵する米国議会図書館、ニカラグアの Museo Archivo Rubén Darío などにまとまった量があるが、その他は小規模なコレクションに散らばっている。

資料の分散は、ダリオの作品全集の編纂にも障害をもたらしてきた。これまでに出版された代表的な「全集」に、Alberto Ghiraldo の編による *Obras completas* (Madrid: Mundo Latino, 1917-1919) と M. Sanmiguel Raimúndez による *Obras completas* (Madrid: Afrodisio Aguado, 1950-1953) があるが、いずれも収録作品は不完全であるうえに、テキストに注などは一切付されておらず、明らかな誤植も目立つ。以降、詩集ごとの批判校訂版や、新たに発掘された新聞・雑誌記事などが刊行されてきたものの、決定版というべきダリオ全集は今も

存在しない。ダリオのテキストを論じる際は、扱う作品やテーマに応じて依拠するエディションを適宜選ばなければならないのが現状で、どのような作品がどのエディションに収められているのかの全体像を把握するのにさえかなりの手間がかかる。

2つの作業が完成すれば、ダリオのあらゆる作品とデータへのアクセスが格段に容易になり、新たな視点からのテキスト分析や従来の議論の見直しを促すだろう。近年ダリオについては、主に米国と欧州から20世紀末以降に生じた「世界文学」の議論の枠組みで言及されることも多く、スペイン語圏の外からもプロジェクトの成果の需要は高まっている。さらに、「ダリオ十年紀」のあり方は、順調に進めば、情報通信技術を活用して遠隔地の研究者たちを結ぶ将来の作家共同研究プロジェクトのひとつのモデルとなりうるかもしれない。

筆者も今後何らかの形でプロジェクトに関わっていくこととなり、まずは日本の研究者にプロジェクトのことを伝えられればとこの度筆を執った。より多くの方に知っていただくことが、マンパワーと資金の両面で欠かせない広範な研究者と研究機関の協力につながり、作業の迅速で継続的な進捗に資すると考えるからである。プロジェクトは目下、高解像度スキャナー等の機器の購入、全集のうち2017年刊行予定の2巻の編集と印刷、メンバーの会合のための旅費に係る資金協力を広く募っている。

プロジェクトに関する問い合わせ、提案、電子メールで無料配信される *Boletín informativo* の受信申し込みなどは、以下の UNTREF 内事務局が受け付ける。

Archivo Rubén Darío Ordenado y Centralizado (AR.DOC-UNTREF)

Suipacha 925/927 (Galería) · Puerta 2

C1008AAS Ciudad Autónoma de Buenos Aires - Argentina

+54 11 4893 0961 (ext. 208) archivorubenario@untref.edu.ar

(たなせ・あずさ マドリード・コンプルテンセ大学博士課程／東京大学大学院博士課程)

【新刊案内】

2015年6月から2016年5月までのスペイン・ラテンアメリカ関係の新刊書です。遺漏があるかもしれません。ご教示願います。

- エドゥアルド・メンドサ『グルブ消息不明』柳原孝敦訳（東宣出版、2015.07）
- ホセ・ドノソ『ロシア侯爵夫人の失踪』寺尾隆吉訳（水声社、2015.07）
- ロベルト・アルルト『怒りの玩具』寺尾隆吉訳（現代企画室、2015.09）
- ジョシュ『バイクとユニコーン』見田悠子訳（東宣出版、2015.09）
- 宇田川彩『アルゼンチンのユダヤ人一食から見た暮らしと文化』（風響社、2015.10）
- キルメン・ウリベ『ムシェ 小さな英雄の物語』金子奈美訳（白水社、2015.10）
- セサル・アイラ『文学会議』柳原孝敦訳（新潮社、2015.10）
- ロベルト・ボラーニョ『はるかな星』斎藤文子訳（白水社、2015.11）
- エルナン・コルテス『コルテス報告書簡』伊藤昌輝訳（法政大学出版局、2015.11）
- 国本伊代編『ラテンアメリカ21世紀の社会と女性』（新評論2015.12）
- マリオ・バルガス＝リョサ『つつましい英雄』田村さと子訳（河出書房新社、2015.12）
- ファン・ゴイティソロ『スペインとスペイン人』本田誠二訳（水声社、2015.12）
- 菅孝行編『佐野硯 人と仕事 1905-1966』（藤原書店、2015.12）
- ファン・ガブリエル・バスケス『物が落ちる音』柳原孝敦訳（松籟社、2016.01）
- ファン・ガブリエル・バスケス『コスタグアナ秘史』久野量一訳（水声社、2016.01）

- マリア・ピラール・ラケルト・デル・イエロ『ヴィジュアル版スペイン王家の歴史』青砥直子、吉田恵訳（原書房、2016.02）
- 黒田学編『スペイン語圏のインクルーシブ教育と福祉の課題 スペイン、メキシコ、キューバ、チリ』（クリエイツかもがわ、2016.03）
- 細田晴子『カストロとフランコ—冷戦期外交の舞台裏』（ちくま新書、2016.03）
- 上川通夫、川畑博昭『日出づる国と日沈まぬ国 日本・スペイン交流の400年』（勉誠出版、2016.04）
- ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ『サーカス—えも言われぬ美しさの、きらびやかにして、永遠なる』平田渡訳（関西大学出版部、2016.04）
- 近葉愛子、春日光子『あかね—在メキシコ日系移民・春日光子とその短歌』（Texnai 2016.04）
- マリオ・バルガス・ジョサ『水を得た魚—マリオ・バルガス・ジョサ自伝』寺尾隆吉訳（水声社、2016.04）
- カルロス・フエンテス『テラ・ノストラ』本田誠二訳（水声社、2016.05）
- バルタサル・グラシアン『人生の旅人たち エル・クリティコン』東谷穎人訳（白水社、2016.05）
- R・リーバス&S・ホフマン『偽りの書簡』宮崎真紀訳（創元推理文庫、2015.05）

【『HISPANICA』編集委員より】

『HISPANICA』第61号の原稿を募集しています。論文・研究ノート・書評を投稿規定に従い、2017年3月1日から31日のあいだにご投稿ください。

（送付先）日本イスパニヤ学会事務局

〒170-0002 東京都豊島区巣鴨1丁目24-1 第2ユニオンビル4F

（株）ガリレオ学会業務情報化センター内

多くの会員からのご投稿をお待ちしております。

【編集後記】

会報22号の「編集後記」で日本翻訳大賞について触れた。インターネットで寄附を募るクラウドファンディングで資金を調達し、審査委員が手弁当で運営する賞だ。嬉しいことに近年盛んなスペイン語からの翻訳作品が「こうした期待を集める催しのようなものの審判に堪え、多言語からの翻訳作品と拮抗していかなければならないようだ」と書いた。

別に予感したわけでもなんでもないのであるが、第2回の日本翻訳大賞に本学会会員の金子奈美さんが選ばれた。スペイン語ではなくバスク語からの翻訳だ。私のくだんの文言は、スペイン・イスパノアメリカがまた多言語世界でもあることを捨象した上で「スペイン語」からの翻訳に触れたものだったのだけれども、現実には私の認識のはるか上を行っていたようだ。対象となった作品、キルメン・ウリベ『ムシェ』についてはその書評を本号に掲載することができた。

金子奈美さんはところで、昨年の学会奨励賞の受賞者でもあるのだが、書評はやはり奨励賞受賞者の南映子さんをお願いした。若い世代の活躍を言祝ぎたい。

（広報担当理事 柳原孝敦）